

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第70号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

秋田城下町の石敢當

高橋 誠一

Contents

Page 1

 巻頭
秋田城下町の石敢當
高橋誠一

Page 2

 卒業生便り①
あの日わたしは
下河敏彦

Page 3

 秋の日帰り巡検
奈良町の歴史景観
と観光活性化
神崎貴充

Page 4~5

 研究ノート
清乾隆中期(1750
年)北京にみられ
る宗教建築の分布
とその実態
張 旭

Page 6

 卒業生便り②
「研究者希望」を
実現するために
本岡拓哉

 プエルタ・オサリオ
便り

 セビーリャ・オレ
ンジ街路樹のもと
で
野間晴雄

Page 7

 学窓から
卒業にあたって
木場隆弘

教室だより

Page 8

 随想
月山の回想
松田順一郎

Page 2-3, 6-7 ...

 2013年度
卒業生・修了生
からの一言

数年前から秋田へ行きたかった。高校時代の友人が住んでいた場所を見つけたのである。彼は高校卒業後、父君の秋田大学への赴任にしたがって移り住み、宅浪をしていた。一橋大学法学部に合格し、在学中から司法官試験を受験し続けたが、成果をあげることができなかった。「もうあきらめろよ。いまならやりなおせるぞ」となんども言うにつれて、やがて疎遠になっていった。高校の英語の非常勤講師をしながら挑戦し続けていた彼が、下宿で亡くなっていたことが発見されたのは、つい数年前である。それ以来、秋田を訪れて、彼の見た景色を見たいと思うようになった。加えて、琉球でよく見られる魔除けとしての石敢當が、秋田に数多く設置されていること、重要伝統的建造物群保存地区の角館武家屋敷地区を見たいという理由もあった。

2013年6月、秋田空港ビル案内所の若い女性を見て、びっくりした。まるで日本人形のような人であった。秋田美人というけれど、これほどとはと驚きつつバスで市内へ。この驚きは4日間味わい続けることとなった。市内を歩いていると、このような女性がきわめて多いのである。

それはさておき、比内地鶏の親子丼を食べてから、県立図書館で資料を集め、石敢當を見てまわった。城下町地区に、38基もの石敢當がある。この数は、本州では最も多い数である。そのうち10基ほどを確認したが、いずれも原則にしたがって、道路の突き当たりの地面に接して設置されている。ところが「敢」が「散」に誤っている例もある。この点からいえば奄美諸島と類似しているとの印象を受けたが、それじゃ奄美から伝わったのかといえ、そうとも言い切れない。要するに、なぜ秋田に石敢當が多く見られるのかということについてはよくわからないのである。琉球経由か薩摩の影響か。江戸時代の儒学者が、多発する疫病や災害に対して、中国の魔除けを紹介・奨励したという説

が有力であるが、それじゃなぜ誤字が多いのかという問題も生じてくる。

ホテルで小休憩した後、紹介してもらった居酒屋へ行った。清潔感あふれる調理場で、にこやかに客に対応しつつも手を休めることなく働いているスタッフに感心した。「また明日」と約束した後に、10mばかり歩いて、これもまた紹介してもらったスナックに入った。母娘で経営している店で、数名の人と親しくなって、じゃあまた明日といい交わしつつホテルへもどった。なぜこんなことになってしまうのだろう。結果として連続三日、おなじコースを辿ることになってしまった。警視、JR助役、大学の先生、長距離トラックの運転手、不動産会社の社長、もちろん店の人、秋田に新しい友人ができた思いである。この癖はなおりそうもない。

翌朝、友人が住んでいた駅東の手形地区を歩いた。新市街地に変えられているが、この辺も歩きよったんやろな、奈良育ちの彼には雪がこたえただろうななどと思いつつ小雨の中を秋田大学まで足を伸ばした。

その後、市内循環バスで市内を一周してから、新幹線で角館駅へ向かった。稲庭うどんを食べてから、武家屋敷地区。道幅が広いから、閉塞感はほとんどなくて、おしゃれな黒板塀と緑と広い空、黒板塀を背にした古い郵便ポストのある風景に感激してスケッチをした。妻や娘たちへのお土産を買った店の女性にすすめられて、田沢湖。神秘的な湖面に見入り、なるほどここにも龍が棲んでいるのだと、琉球の首里や平安京の神泉苑にも思いをはせた。

三日目は城跡を回った後に横手名物の焼ソバを食べ、定期観光バスで男鹿半島・八郎潟・ナマハゲ資料館など。最終日も市内を散策した。ふりかえれば、調査というより観光・感傷旅行というものになってしまった。実は、妻から、あなたは旅にでても調査のことしか考えていない、もっと心の余裕をもって楽しむことを心がけたほうがよいといわれ続けている。本人としては、調査そっこのけでふらふら遊んでいるつもりではあるが、どうも彼女の目にはそのようにつらならしい。今回は、妻の忠告に従ったことになる。(遺稿・本学名誉教授)

卒業生

青竹美晶

これまでで最も強く心に残っているのは、三年次の島田市での実習調査です。班のメンバーや先生方、島田市の方々に協力して頂きながら、報告書を完成させることができました。ゼミでは自分が関心のある分野について発表できる機会があり、良かったです。

石崎 遥

大学生生活色々ありましたが楽しかったです。地理学専修の皆さん色々お世話になりました。ありがとうございます。皆さんもお身体に気を付けて毎日お過ごし下さい。

岡部なつみ

個性豊かな先生方に囲まれながら巡検や実習調査で色々な土地を訪れ、自分に合った大学生活を送ることができたと感じています。4年間ありがとうございました。

勝部友恵

初めは不安でいっぱいでしたが、他専修とは違い様々な場所へ調査に行くことや、多様な分野を学ぶことができ、本当に地理学・地域環境学専修に入って良かったと思いました。ご指導を下さった先生方には、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

○1995年1月13日

奇しくも金曜日でした。正門から出て2回左折し名神高速道路の坂を下りきった、いままではR&E 関大前マンションが立地する近くの家に下宿していた私は、16時に迫った卒論提出に向けラストスパートの最中でした。文学部事務室までの距離と自分の鈍足を計算しながら、まだ大丈夫と15時50分くらいまでは部屋にいて、拙い文章をこれまた拙いワープロ(2ヶ月ほど前に生協で買ったばかり)さばきで修正していました。そして、後にも先にも経験しないほどの全力疾走で法文坂を駆け上りました。みな考えることは一緒で、文学部事務室前には他の学科の人たちもいて、行列ができていました。実際に提出したのは16時を10分ほど過ぎていたでしょうか。

卒論のタイトルは「猪名川流域の地形と洪水特性」。猪名川流域の微地形分類・土地利用の変遷と昭和時代に繰り返された洪水氾濫の形態とがどのような変遷をたどったか記載したものです。関西の災害環境特性としては水害がメインであり、地形と洪水の関係から都市形成の基盤まで推察できるのではないかと大きなことも考えていましたが、その「4日後」でした。

○1995年1月17日

成人の日の振り替え休日が終わった翌日。卒論は出したものの、恥ずかしながら単位をいっぱい残していたので、後期試験勉強のため夜更かしは続いていました。

その日の午前5時46分の衝撃はもちろん忘れることはできません。

下宿のおばさん、娘さん、近所の方々、特に女性の方は悲鳴とともに外に飛び出していました。私もとっさに2階の窓を開けていましたが、屋根が落ちるでもなくこのあたりは大きな被害は出ていないことをひとまず安堵。と同時に、近畿の活断層分布と知人・友人の住まいの分布が自分の頭の中にプロットされ、ここでこれだけのゆれに見舞われるということは、震源地は大変なことになっている、みな大丈夫か? という心配が交錯する不思議な心理状態でした。

○2011年3月11日

仕事で丹沢山系の防災施設点検を行っていました。丹沢山系というのは神奈川県北西部の山地で、1923年9月1日の関東大震災で多数の谷壁斜面が崩壊し、その後砂防堰堤も造成され

ました。凝灰角礫岩の風化・破砕が顕著であり冬の北風で落石のパラパラという音が聞こえるほどですが、砂防堰堤の築造されている場所は新鮮岩が露出する箇所であり、80年以上経過しても健全な状態を保っている。名工は地形・地質をよく見ているという格言を実感しました。インフラの維持管理が声高に叫ばれる昨今ですが、古いから傷むという単純化された考え方が支配的です。そうではなく、歴史的建造物や古民家など何度も大地震・風雪に合いながらも立派に耐えているのは、その土地の地理的条件に応じた建築技術が用いられているからです。

話を「その日」に戻します。午後5時頃携帯電話の電波が通じる場所まで車を走らせ会社に業務連絡をしようにもつながりません。すると九州の兄から安否を確認する電話があり、車のラジオをつけて何が起こっていたかを知りました。

○2011年4月29日

東日本大震災では、液状化現象も多数発生しました。上司が千葉県の稲毛海岸の液状化が特徴的な分布をしているというので、調査に同行させてもらいました。埋立地の旧河道というべき濡筋に液状化が集中し、1987年千葉県東方沖地震でも類似した傾向があることが分かりました。やっていることは空中写真や旧版地形図の判読、現地調査にヒアリング、微地形分類図の作成と、卒論とまったく同じです。やはり、現地を歩き写真と古地図といった定性的な情報の記載、モデリングが原点であるという思いを新たにしました。この思いは、応用地質学会誌vol.54, No.2に投稿した報告で「現行の地形分類では「埋立地」と一括されることが多いが(中略)地形発達史的背景や土地利用履歴、地質情報との関連を明らかにすべき」という結びに込めました。

○2013年10月24日

気がつけば、入学した時の木庭先生の年齢に達してしまいました。「人生の無駄」をどれだけ繰り返したことでしょう。

関西大学地理学教室のホームページがリニューアルされ、大変素晴らしいサイトが構築されていました。皆様とともに良い情報を提供できるように微力を尽くしたいと思います。

(1994年度卒業)

秋の日帰り巡検

奈良町の歴史景観と観光活性化

神崎 貴充

2013年10月27日(日)、私たち地理学教室の一行は、奈良市に向かった。今回の日帰り巡検のテーマは「奈良町の歴史景観と観光活性化」というもので、奈良町をはじめ奈良市内の様々な歴史的建造物を巡った。

集合したのは近鉄奈良駅の噴水前。駅前には近代的な建物が並び、とても歴史にあふれる街のようには思えない。もちろん鹿もいない。そんな不思議な感覚にとらわれながらも、地図とパンフレットを連れて9:30に出発した。

まずは「東向南商店街」。集合場所から目と鼻の先にある商店街だ。一見すると、何の変哲もない一般的な商店街である。なぜ「東向」なのか疑問であったが、大学院生の方の話によると、興福寺を建てたとき、僧侶や建築家を支える人たちの住居が道に向かって東向きに建てられたことに由来するそうだ。そして今は奈良で最も栄えている商店街。古い土産物屋から近代的な飲食店が立ち並び、立派な商店街に育っている。

三条通りを渡り、次に私たちが向かったのは、今回の巡検のテーマに含まれている「奈良町」だ。近代的だった近鉄奈良駅前とは風景が一変し、南へ歩いて十数分ほどでこんなにもレトロな町並みが存在するのかもしれないと思うと不思議な気持ちになる。近世から明治にかけて商工業の街として繁栄したこの地域には、現在でもその面影を残した家屋が残り、その玄関前にはおまじないとして、「身代わり猿」という吊るしものが飾られていた。途中、「ならまち格子の家」という古い町家に立ち寄り、その風情ある建物内を見学した。間口は狭いものの、中に入ると長い奥行きもあったためか、意外に広く感じた。

次に「元興寺」へと向かった。蘇我馬子が飛鳥に建立した日本最古の本格的仏教寺院である法興寺(飛鳥寺)を前身とする。住宅街に突如現れる風格のあるお寺で、「古都奈良の文化財」の

1つとして世界遺産に登録されている。境内はとても広く、その昔は学問寺として栄えたそうだ。ここで、昼食のためにいったん解散した。

午後からは、近鉄奈良駅よりも北のエリアを散策した。「東向北商店街」を抜け、着いたのは「奈良町奉行所跡」、現在の奈良女子大学である。まるでヨーロッパのお屋敷のようなお洒落な門の奈良女子大学だが、かつては時代劇でもおなじみの奉行所があったとはなかなか想像しがたい。しかし、その構内に眠る奉行所跡からは動物の骨などが出土し、最近注目を集めているという。

次に向かったのは「聖武天皇陵」。歴史の授業で誰もが触れたであろう聖武天皇だが、そのお墓は平城京の北東部に位置する。この場所はいわゆる鬼門で平城京を守っているとされ、聖武天皇が建てた東大寺のそばにある。この東には、聖武天皇の皇后である光明皇后陵があり、夫婦でこの地に眠っている。

そして一行は「東大寺の転害門」へ、ここで集合写真。芝生広場に堂々と構える門である。柵があるために一般人の通行はできず、ここを通行するのは神様なのだそうだ。地理学教室の誰もが、この門に見とれた。最後に我々は「興福寺」にたどり着いた。あの「阿修羅像」で知っている人は多いだろう。五重塔は見られたものの、そのほかの建物はどうやら改築中らしく、ほとんど見られなかったのが残念である。平安時代から戦国時代にかけて隆盛を極めたものの、それ以降は衰退した。しかしながら、現在は元興寺と同じく世界遺産に認定され、多くの人々が訪れている。

近鉄奈良駅を中心に、南側と北側の長い距離を巡り歩き、疲れたのが本音であるが、多くの歴史的建造物に出会うことができ、造詣を深めることができ、有意義な巡検であった。

(本学2回生)

河村恭行

三回生時の実習報告書や卒業論でのフィールドワークは大変貴重な経験となりました。また、高橋先生の学びの扉を受けて、この地理学科に入ろうを決めたので高橋先生には感謝の一言です。

木場隆弘

今まで自分が知らなかったことを巡検や地理の授業で知ることができ、楽しい思い出ばかりでした。社会に出てからは、この4年間の経験を糧にしていきたいです。本当にありがとうございました。またどこかで会いましょう！

後藤修平

関西大学地理学教室に入り、日帰り・1泊巡検、実習調査を通して様々なモノを見て触れて、自分の見聞を広めることができました。大学に入学した当初は「地理学」という学問のイメージが漠然としていて、どのような勉強をするのか不安もありましたが、4年間の集大成ともいえる卒業論文では、自分の興味ある分野の研究に没頭することができました。また、この教室で多くの友と出会い、親睦を深め、充実した4年間を過ごせました。地理学教室の皆さん、どうもありがとうございました。

後藤達弥

在校生のみなさん、卒業論文頑張ってください。4回生になるとすぐにやってきます。

(6ページに続く)



清乾隆中期（1750年）北京にみられる宗教建築の分布とその実態

張旭 ZHANG Xu

1. 『乾隆京城全図』と『北京古建築地図集』の利用

『乾隆京城全図』は乾隆皇帝が郎世寧を指導者とし、工部の画工に命じて、当時の西洋の先進的測量技術を用いて作製した北京城図である。これには、皇城、内城、外城が描かれ、道路、城壁、宮殿、王府などの重要な建築物だけでなく、当時の住宅、店舗、櫓、寺、観、兵舎、倉庫なども詳しく描かれている。建築の向きや建物階数なども知ることができ、大きな建築物についてはその棟の両端に設置された鯨までも描かれている。この古地図を原資料として歴史地理学的に分析すると、1750年当時の北京の景観を取り出すことができる。

この地図は、国立情報学研究所からダウンロードでき

る。地図は17ファイルに分かれているので、それぞれを印刷してつなぎ、その上で、研究する範囲を用意した。この『乾隆京城全図』は203枚のブロックに分かれている。実際の測量に基づいており、個々のブロックの実距離は東西1.5km、南北1.25kmとされ、地図の縮尺は1:3600となっている。

胡ほか（2009）の『北京古建築地図集』には、2008年現在の北京に残る古建築の分布が示されている。この地図集の中には、古建築の分布図だけでなく、それぞれの古建築の紹介、写真、住所も記載されている。

ここでは、北京城の外城の東の部分为例として、検討する。北京城外城の東の部分は、図1のブロックが覆われる区域で、現北京の崇文区に対応する。

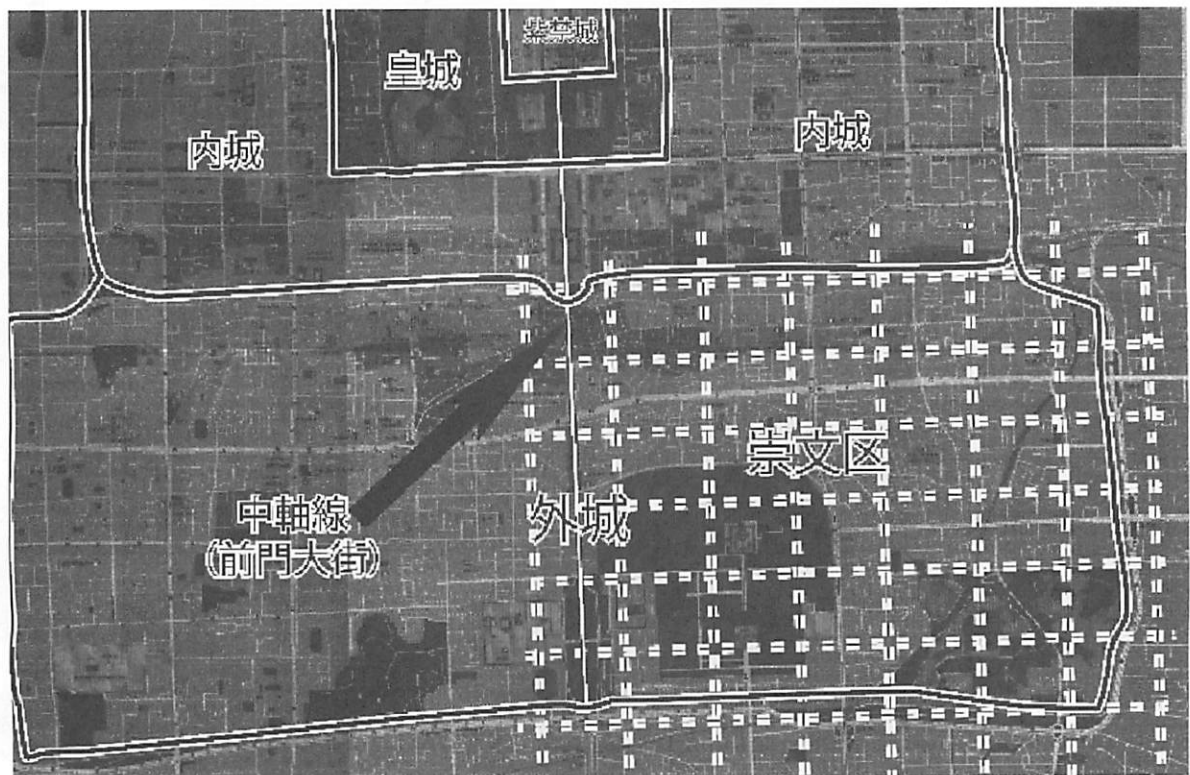


図1 『北京古建築地図集』の「北京現存の古建築の分布図」局部 筆者加筆 北京清華大学出版社2008年

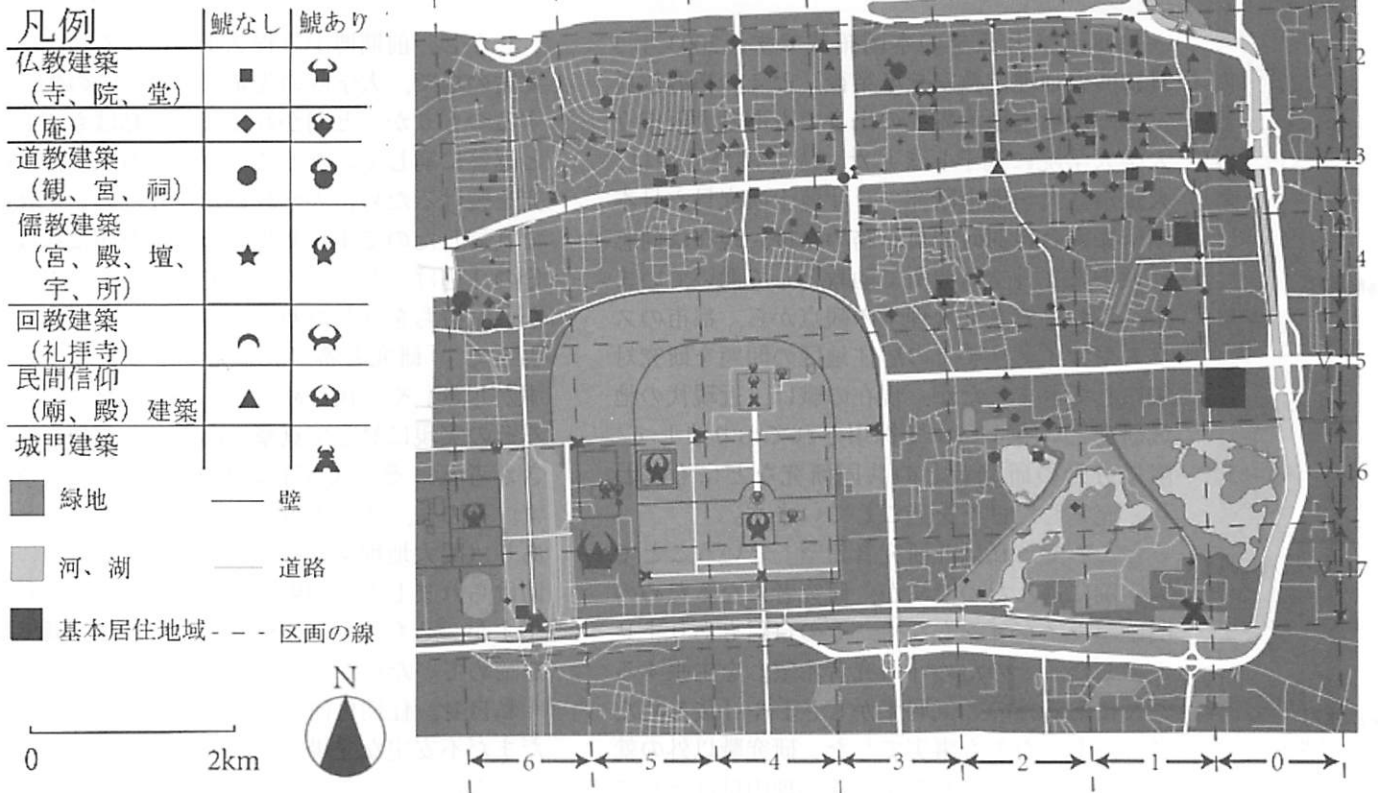


図2 「清乾隆中期（1750年）北京外城東南地域の宗教建築、城門の分布図」筆者作成

表1 乾隆中期（1750年）北京外城東南地域の儒教建築物の面積（一例）

エリア名	宗教建築名	面積 (m ²)
V-16	皇穹宇	11,664
	円丘壇	63,504
	齋戒宮	77,112

2. 清乾隆中期（1750年）の北京崇文区に分布する宗教建築物とその面積

図2に示したように『清乾隆図』と『古建築地図集』を利用し、清乾隆中期の北京外城東南地域の宗教建築、城門の分布図を作成した。各々の宗教建築の位置を確定した後、古地図を利用してそれぞれの面積を測定する。表1は計測例である。

両図によると、儒教建築の多くは該当地域の西南に位置している。なぜなら、ここは儒教を信奉する皇帝が天帝をまつための天壇にあたるからである。また、図2に見られるように、建築規制での高級レベルに対応する建築を象徴すると考えられる鯢は儒教建築にしか見られない。表1に示したように儒教建築物の面積は非常に大きい。これによって、儒教を非常に重視する当時の皇帝は他の宗教建築よりも大規模に儒教建築を建設したので

ある。

3. まとめ

清乾隆中期（1750年）の北京城には宗教建築が多数存在している。『乾隆京城全図』と『北京古建築地図集』を使って、宗教建築の分布状況などを捉えることができる。また、各々の宗教建築の面積の計測も可能である。分布図と面積のデータから各宗教建築の相互関係を分析することができる。

現状では、宗教建築の分布状況と以前筆者が研究していた装飾物との繋がりの検討が不十分である。例えば、宗教建築の類別によってどのように装飾物の分布に影響を与えるのかというような問題は今後の課題と考えている。

参考文献

国立情報学研究所-デジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵]貴重書 デジタルアーカイブ。『乾隆京城全図 1750年』縮尺 (1:3600)。
http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/creator/koain_kahokurenakubu_seimukyoku_chosasyo.html
 胡介中, 李路珂, 李菁, 王南, 2009. 『北京古建築地図集』縮尺 (1:46200) (上). 清華大学出版社.

そんな卒業論文は最初のほうに怠けていると後々ちゃんとしておけばという後悔が残ります。そのようなことではない人たちだと思っていますので頑張ってください。

篠崎淳平

本当に楽しい四年間でした。何より地理学教室で過ごした時間は私の財産です。仲間に恵まれ、実習調査など貴重な経験させて頂き先生方、そして仲間達にはとても感謝しています。ありがとうございました。

柴原悠司

大学生活の中で、最も大変だったことは、実習調査報告書の作成でした。それまでも様々なレポートを書いてきた大学生活でしたが、実習報告書の作成は、一つの報告書を皆で書き上げる大変さがありました。しかし、同時にやりがいがある授業で思い出にも残り、良い経験ができました。これまでありがとうございました。

中村圭佑

地理学専修では、普段行く機会がないような地域に巡検や調査として赴くことができたため、刺激的な三年間を過ごすことができました。先生方や同期の皆さんも個性的な方ばかりで、授業も毎回楽しめました。地理学教室の皆さん、本当にありがとうございました。

卒業生だより②

「研究者希望」を実現するために

本岡 拓哉

1998年4月入学の本岡拓哉です。2003年3月に関大地理学教室を卒業後、ゼミの指導教員であった橋本征治先生の出身でもある大阪市立大学大学院に進学しました。大学院修了後は、大阪市立大学都市研究プラザ博士研究員や日本学術振興会特別研究員を務めた後、現在は同志社大学人文科学研究所で助教として働いています。これまで人文地理学の観点から、都市のスラムやマイノリティの居住地区の問題を研究対象にしてきましたが、現在の職は、近現代の地域研究というテーマで採用されておりまして、隣接分野の研究者との共同研究などにも携わり、充実した日々を過ごしています。

ところで、私は「研究者希望」ということで大学院に進んだのですが、研究者になるための明確なビジョンもなく、その自信もありませんでした。そのため「研究者希望」を主張することにある種の「気恥ずかしさ」や「後ろめたさ」があったのも事実でした。研究職以外の就職活動も準備しておらず、その理由付けとして「研究者希望」を持ちだしたことさえありました。ある意味、就職活動からの「逃げ」としての「研究者希望」でもあったと言っても過言ではありません。

しかし、前期博士課程2年目になる頃、ある宴席の場で、大学院の先輩に「君はこの先どうするつもりか」と聞かれました。私はもともと返答に窮していたところ、その方が「俺は研究を続けるために大学教員になりたい」と真顔で宣言したのです。あまりの真剣な顔に私は自分の「逃げ」としての「研究者希望」に申し訳ない気持ちを感じたわけです。こうした体験によって、「研究者希望」を発することの「気恥ずかしさ」や「後ろめたさ」が吹き飛び、むしろその実現に対して真摯に向き合い、何をすべきか考え、そして実行に移せたように思います。その後、多くの方々の協力や巡りあわせもあり（関大地理学教室の先生方の叱咤激励にも助けられました）、現在も研究職に就けておりますが、そもそもこの機会がなければ、研究職を諦めていたのかもしれない。

私自身、任期付研究職ということもあり、まだまだ不安定な立場ですが、次のステップに移るときには常にこのことを思い出すようにしています。他の皆さんに比べて私は遅すぎたのかもしれませんが、いずれにせよ、自分の「将来」に向き合うことの重要性をこの文章を書くに当たり改めて感じました。（2002年度卒業）

プエルタ・オサリオ便り セビーリャ・オレンジ街路樹のもとで

野間 晴雄

昨年12月23日に、3ヶ月過ごしたロンドンから、スペイン・アンダルシア自治州の州都、セビーリャに居を移しました。NHK ラジオのスペイン語講座のテキスト半年分と辞書を持参しての一人暮らしの始まりです。確かに公共交通とか庶民のバルではスペイン語しか通じません。クリスマスを挟んだので、最初の数日は食べるだけで悲惨でした。スーパーは休業、レストランや店はシャッターを閉め、一流ホテルは滞在客用の特別メニューのみ。しかたなく旧市街の場末を歩き回って必死に探し当てたのがモロッコ料理店。そこでクスクスを食べ、中国人がやっている食料品・雑貨店（スペインではほぼ例外なく中国人の家族経営で、愛想の悪いことこの上なし）を探し当て、冷凍ピザやパン・ジュースを買い込んでなんとか急場を凌ぎました。ゴンゴンゴンと激しく打ち鳴らされる教会の鐘。夜の10時でしたが、家族が三々五々教会の大きく木の重い扉を押し開けてミサに列を連ねていました。こちらはお腹も満ちたので、アパートに帰ろうとしていたのですが、道がさっぱりわからず右往左往、人影も途絶え

た路上で旧市街を抜け出そうと細かい字の市街地図（道路・路地名が住所となるため）と悪戦苦闘。餓別に学生からもらった首から吊す歩行ライトが重宝しました。ヨーロッパの「アラブの迷宮」を実感したひとときでした。

（本学教授・関西大学在外研究員 滞在期間：2013年9月24日～2014年9月23日、主要訪問国：イギリス・スペイン・メキシコ・キューバ・アメリカ合衆国）

※70号と71号の2回に渡ってお届けいたします。



セビーリャ大聖堂とオレンジ街路樹

学窓から

卒業にあたって

木場 隆弘

私が関西大学に入学し、地理学教室の先生方に初めてお会いした時に感じた印象は「ユルい」というものであった。高校時代に学んだ地理の内容は、山脈や気候の名前をただひたすらに暗記するといういわば「カタい」ものばかりである（私自身、その“カタさ”に魅力を感じて地理学教室を選んだことは言うまでもない）。カタいというイメージが定着していた私の中の地理の概念がその時崩れ去り、不安な気持ちになったことは今となってはいい思い出である。しかし、このユルさこそが地理学を学ぶ上で必要不可欠だと感じるようになった。

2013年度、私は地理学教室の目玉科目のうちのひとつともいえる測量学実習の授業補助を担当させていただくことになった。その際に、「ゆるさ」が重要だと強く感じさせてくれるエピソードがある。私は、授業補助の立場として受講生が測量を行っている姿を見回っていた。その際、ある班の学生が測量を行っていた地点から対象となるものが見えないのでどうしたらいいかと質問を投げかけてきた。確認のために私も測量機器から対象物を確認すると障害物に阻まれ対象物を捉えることができなかった。自身で考えてみるものの打開策が見当たらない。そこで、授業を担当されている先生に対処方法を

を尋ねると、「機器を置く場所を移動したらいい」と何ともあっさりとした答えが返ってきた。そこは、私も含めて受講生全員が考えてもみなかった点であったが、その点に機器を設置するとなるほどうまく対象物が見えるではないか。その際に、遅い気づきではあったが「地理学教室で学んだことはこれだったのか」と体に電流が走ったような気持ちであった。ある事象を一つの点から見るとすぐに限界が訪れるものの、別の視点からみると今まで見えなかったことがみえてくる。また、先生方と話をしていても非常にフランクな雰囲気を醸し出しながらも自身の考えに対する確固たる自信を持たれていたり、ポリシーを徹底されているなど“芯”を感じる人が多い。地理学では、現在の空間を平面的にみる視点だけでなく、その空間を形成するに至ったバックボーンを見る縦の視点など多くの視点がある。この視点をもって物事を捉えるには、知りたい事を自身の中でしっかり把握しておかなければならない。これもある種の“芯”ではないのだろうか。今後社会に出てからは、地理学教室の先生方がもたれているような“芯”を自分の中に通し、教室で学んだ、物事を多面的な角度から見つめる姿勢も貫き通していきたいものである。（本学4回生）

福岡明恵

大学生活の中で一番良かったなと思えることは、地理学に出会えたことです。いつも歩いている道もフィールドワークになる、様々な側面からアプローチできる地理学はとても面白く卒業しても地理を嫌になることはないと思います。巡検調査も大変良い経験になりました。ありがとうございました。

細野佑樹

大阪人に負けず体に張った学祭実行委員。一方でコスプレイヤーに囲まれて働いたアルバイト。教員（特に）や学校のあり方に疑問を感じ学校嫌いだが高中時代が嘘のように、学生生活を楽しむことができました。

教室だより

訃報

昨年秋以来、病気療養中でおられた高橋誠一先生が、2月11日午後12時50分に肝不全のため、ご逝去されました。享年68歳。謹んでお悔やみ申し上げます。

次号の「千里地理通信」は高橋先生の遺徳を偲ぶ追悼特集号をとさせていただきますこととします。つきましては会員の方々に、先生への追悼文や先生との懐かしい想いでなどを下記の要領にて、お寄せくださいますようお願い申し上げます。

記 字数：400字まで。締め切り：2014年5月末。ご寄稿のタイトル、お名前とご卒業年度を明記ください。

■修士研究発表会

2013年9月21日（土）13時から17時まで、修士研究中間発表会が地理学実習室にて行われた。発表者はM1の、井上拓大、家村一平、方立、王大斌、林穎の計5名であった。

■秋の日帰り巡検

2013年10月27日（日）、秋の日帰り巡検が開催された。“奈良町の歴史景観と観光活性化”をテーマに大学院生が現地にて説明を行った。教員、学生（D・M・2回生・3回生）、卒業生では4名の方にご参加いただいた。

■関西大学地理学研究会研究例会

2013年12月14日（土）15時から18時

で第一学舎A301教室にて、文学部セミナー、関西大学地理学研究会研究例会が開催された。M1による帯広市での実習調査の報告、張旭（本学D2）「東アジアにおける古建築の装飾物の地域差違及び形成の原因」、本岡拓哉（2002年度卒業、同志社大学）「都市マイノリティをめぐる（空間・場所・景観）の生成と消滅—大阪・桜ノ宮「龍王宮」を事例に一」、木庭元晴（本学教授）「奈良盆地南縁に分布する低位段丘構成層の堆積原面の侵食ベースレベルを使った復元」の講演が行われた。例会修了後は同学舎一階にて懇親会が開催された。

■寄付金へのお礼

大倉 俊様、吉兼崇博様、渡邊 登様（五十音順）より地理学研究会にご寄附をいただきました。研究会の活動に使わせていただきます。厚く御礼申し上げます。

平岡昭利先生 人文地理学会2013年度
(第13回) 学会賞受賞

2013年度人文地理学会学会賞の学術図書部門にて、本教室ご出身の平岡昭利先生が受賞された。受賞された書籍は『アホウドリと「帝国」日本の拡大—南洋の島々への進出から侵略へ—』（明石書店、2012年11月刊）である。このご著書については、『千里地理通信第68号』にすでに紹介している。

修了生 (M)

牛 錯

巡検を通じて、多くの物事を見ることができ、楽しかった。お世話になった野間先生、伊東先生、高橋先生、木庭先生およびにドクターの齋藤さん、舟越さん、張旭さん、張立宇さん、ありがとうございました。

所 夏弥

都市にまつわる勉強を続け、学んだことを通じ、人の穏やかな日々の生活を守る仕事に携わっていきたいです。目標を与えてくださったことに心から感謝するとともに、関大地理学教室の益々の発展を願っております。

・随想・

月山の回想

松田 順一郎

正月休み明けのラジオで、仙台の男性が羽黒山から一人で月山に向かって雪の中で命を落としたことを伝えていた。学部学生時代、正月休みにノルディックスキーを履いてそこを辿った記憶がもどってきた。

地図を見るとの羽黒山域の南端標高約 300 m から 1984 m の月山山頂までは南南東に 20 km あまり、標高約 970 m の六合目までは火砕流の堆積と山体崩壊でできた長い緩斜面が東西両側の開析谷で挟まれ、比較的幅広い尾根をなして続く。六合目からは東から南にかけて残るカルデラ外輪山の尾根が山頂まで高度を上げる。亡くなった男性は入山地点からあまり遠くない所の積もりたての雪の中で倒れていたようだ。軽い雪中ハイキングの予定だったかもしれない。そこは幅数 100 m の平坦な台地で、ゴルフ場や農地が分布するが深雪に覆われると広い雪原になり、視界を失えばリングワンダリングしそうな場所である。

今はないが、私は大阪から寝台特急「日本海」で鶴岡に到着した。眠っていても車掌が起こしてくれる。駅で大雪警報と異常低温注意報を知った。バスで羽黒山まで行くと、正月に来る人は珍しいと麓の人に言われた。出発した正月 2 日から下山した 7 日まで雪が降り続いた。カメラは電池が凍ってすぐに働かなくなった。

六合目までの緩斜面は、夏道が雪に埋まり視界が 40 m ほどで、地形を頼りにできない。そのためまず視界の範囲で計った歩く速度を 10 分間の道のりに換算する。160 m くらいだったか、かなり遅い。それにもとづいて、方向を外さないようにコンパスを、時間をはかるのに時計を、頻繁に確かめながら 10 分間直進し、たどり着いたと推定される位置を地図に記録し、次の地図上の目標へ方向を決めてまた 10 分間歩くという作業を繰り返す。平坦地が続く時は歩く時間を 20 分にしたり、小山をかかわす時は 5 分に変える。目標地点に正しく着けた

かどうかその時はわからない。翌日の夕刻、六合目避難小屋に行くわけば正解となる。

積もりたての雪は重く柔らかで、スキーを履いていても膝まで沈みスキー板は見えない。昔のテントは雪の切れが悪く、降り続く雪に埋まり、すぐに息苦しくなる。貼りついた雪は室温で融け、湿った 2 日目のテントは 2 倍の重さになる。六合目までの後半は尾根が狭まるため、高い所を選んで歩けばほぼ迷わず進めたが、やはり視界が悪いのでオリエンテーリングを続けた。夏であればバスで 40 分の六合目までの道のりを、脛で雪をかき分け一泊二日費やした。

街のハイカーが廃墟と呼ぶ快適な小屋へは、計算で到着した地点より 100 m ほど遠かった。小屋の手前 100 m で亡くなったという他山で会った夫婦の遭難碑を思い出す。1 階の屋根は雪に埋まっていて、2 階の窓に張り付いた氷をピックルで割って入る。最初の仕事は別棟になったトイレまで 6 m ほどの雪のトンネルを掘ることであった。この天候で山頂を攻略するのは不可能と決め、提出期限の迫ったロバート・マートンの中範囲理論に関するレポートを薪ストーブにあたりながら書いたり、昼寝をし、重い食料をせっせと食べて二日ほど過ごした。雪に閉じ込められた静けさを満喫した。トイレまでのトンネルは雪の重みで崩落し、もう一度掘った。帰路は消えかけた自分の行跡をたどり、半日で入山地点に着いた。

後年、豪雨によってできる雪渓上の穿入蛇行流路を観察しに行った夏、六合目小屋で同宿したテストスキーヤーが、正月の登頂は 1 回では無理だろうと語っていた。好天に恵まれる確率がひじょうに低いからだ。いずれまた、行きたいと思う。なお、月山の東方、一本の沢を横切ったところにある念仏ヶ原で、湿原の主の白蛇に出会ったこともあったが、その話は別の機会にしよう。

(史跡鴻池新田会所管理事務所、関西大学非常勤講師)

千里地理通信 第 70 号

2014 年 3 月 20 日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町 3 丁目 3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：舟越寿尚 家村一平 方立

tel: 06-6368-1121 (内線 4890: 大学院生室)

URL: <http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/>

e-mail: k054379@kansai-u.ac.jp

郵便振替：大阪 00970-4-81149